

目的 幼児の思いやり行動の発達過程を明らかにし、更にその精神構造を追求することによって、思いやり行動を起こす要因を明らかにしたい。

方法 これまで作成した幼児の思いやり行動50項目の行動評定表により、3才（年少児20名）4才（年中児410名）5才（年長児300名）の幼児を対象に、5段階の選択肢によって思いやり行動を評定する。評定した結果を集計し各年齢ごとに行動項目の評定結果を因子分析し、思いやり行動を起こしていると思われる因子を各年齢ごとに抽出する。その結果から、思いやり行動を起こす要因を考察する。

結果 各年齢ごとに思いやり行動を評定し因子分析をした結果、次の因子を抽出した。

- 3才（年少児） ① 協力・自己充実・気持の受入れ・我慢 ② 援助 ③ 状況分析  
 ④ 情緒の表出 ⑤ 自己主張
- 4才（年中児） ① 援助 ② 気持の受入れ・葛藤・協力 ③ 自己充実  
 ④ 情緒の表出 ⑤ 自己主張 ⑥ 状況判断
- 5才（年長児） ① 援助・状況判断 ② 自己充実・協力 ③ 気持の受入れ  
 ④ 自己充実 ⑤ 情緒の表出 ⑥ 我慢

以上の結果から、自己受容と考えられる自己主張や情緒表出はいずれの年齢でも思いやり行動を起こす要因として必要ではあるが、幼児期になると中心的な要因にはなっていない事が判明した。また、他者受容と思われる援助や状況判断の行動は、5才児に第一因子として表われた。その中間の行動が幼児期には非常に重要な経験と思われる。